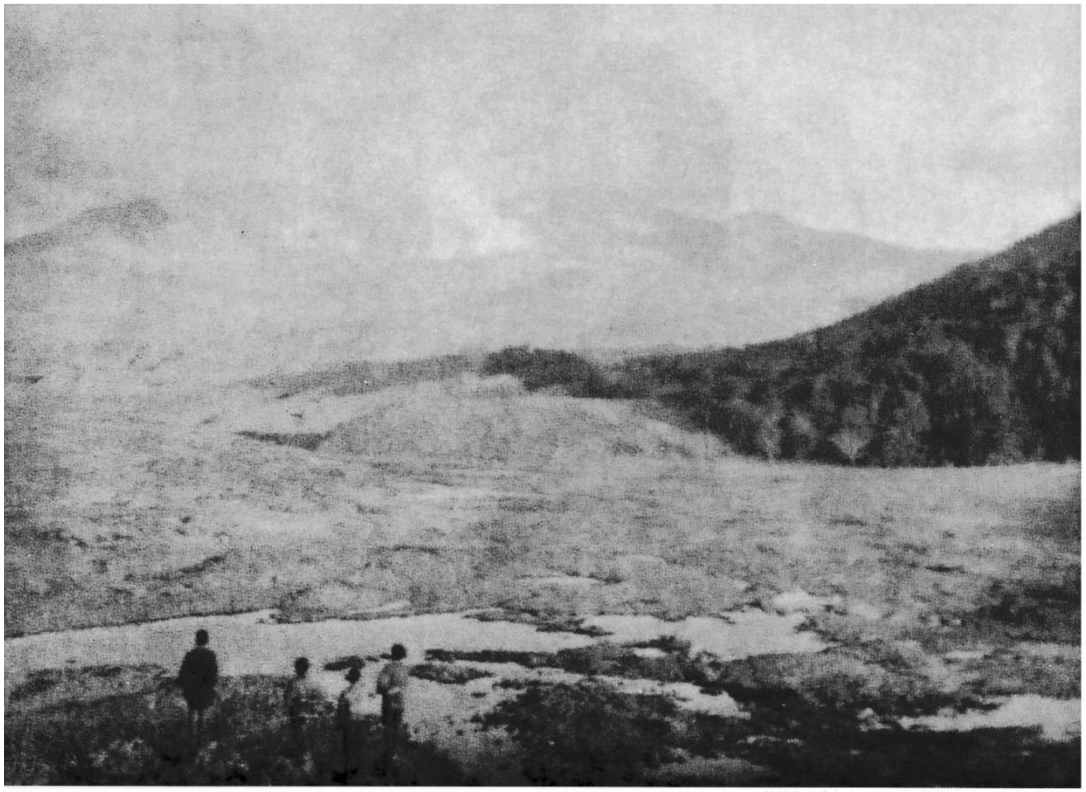


磐梯山の噴火で泥流に飲み込まれた長峯を見下ろす

磐梯山噴火からの復興

阿部久仁於

明治二一年（一八八八）の磐梯山噴火は、小磐梯の山塊を吹き飛ばし、累々とした大小の岩石は、赤渇色の流れ山をいくつも残し、裏磐梯を不毛の大地と化した。

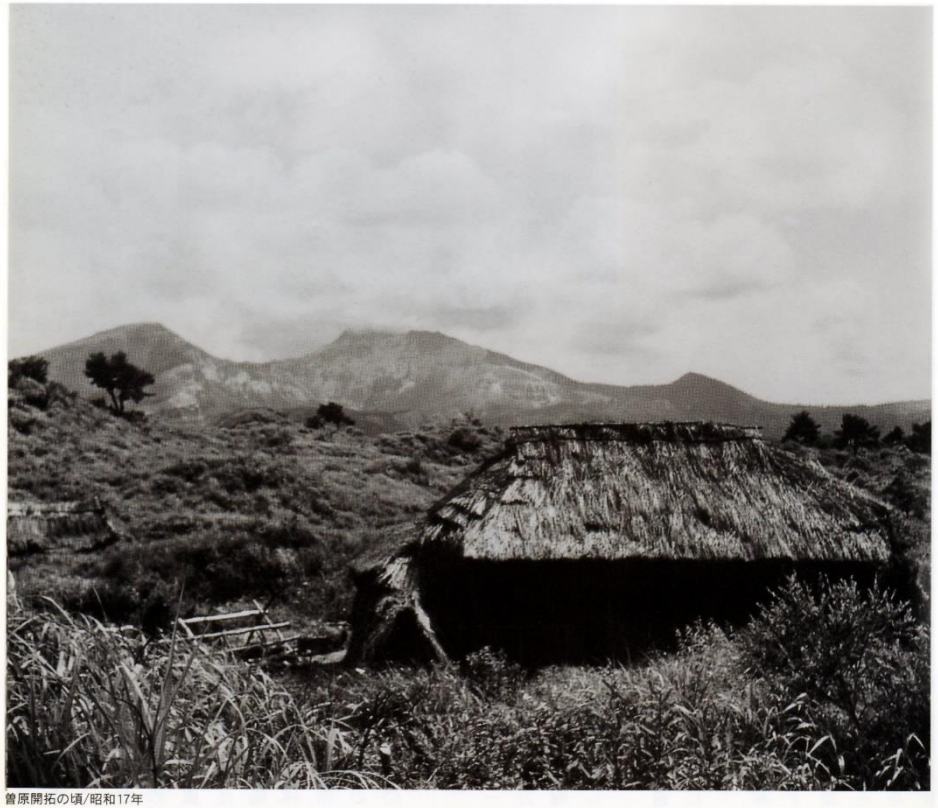
しばらくして国はこの大地を民間の資本と労力で開拓、緑化しようと呼びかけた。国有地を民間に無償で与え、植林成功の後は、払い下げると希望者を募った。希望者に、噴火の湯の湯守白井徳次がいた。白井は耶麻郡姥堂村（現塩川町）に生まれる。明治二九年（一八九六）に磐梯山噴火口に噴火の湯を開いている（磐梯山噴火前には上ノ湯、中ノ湯、下ノ湯があったと言うが、噴火で上ノ湯と下ノ湯は吹き飛び、中ノ湯が残ったという）。徳次は噴火の湯の温泉経営をするかたわら、明治二三年（一九〇〇）噴火の湯に「噴火殉難者供養碑」を建立した。徳次は噴火地の緑化を願い、土地利用の認可後、広範囲な荒無地に、桧原村長峯の佐藤栄次郎らと松などを植林してきた。明治四四年（一九一一）徳次は六七歳で亡くなり、長男徳八は、父の事業を引き継いでいる。大正一二年（一九二四）磐梯山噴火の生き残りであった桧原村長峯の佐藤栄次郎の居宅が火災に遭い、噴火地内の徳次との「共同借地権」を徳次の長男徳八に譲渡していた。

磐梯山、噴火の湯には寿田館も建っていた。（猪苗代町川上温泉の人、初代寿田亥三郎）寿田館の建設年は不明、白井館よりおくれて建っている。噴火の湯の磐松館は、桧原村桧原の小椋直由の経営。開業は昭和一二年（一九二七）である。湯量確保のため、小椋直由（磐松館）の発案により白井徳江（白井館）、寿田トミエ（寿田館）の三者で、共同風呂建設計画を昭和二四年（一九四九）に提案され、ようやく昭和二七年（一九五二）に至り完成した。

しかし、昭和二九年（一九五四）の春、四月二日午後一時半ころ磐梯山噴火口壁の山崩れで、噴火口の銅沼近くにあった噴火の湯二軒は押し出され倒壊した。その後は営業していない。山崩れの跡地の下に広がる広い斜面をいかし昭和二二年（一九五八）冬に「裏磐梯スキー場」はオープンしている。

喜多方町（現喜多方市）の資産家で、酒造業の矢部長吉は、明治三五年（一九〇二）に五色沼一帯の広い荒蕪地約七〇〇ヘクタールの認可を得て、松を植林してきた。長男善四郎も汗を流した。しかし、全財産を使い果たし破産に追い込まれていた。善四郎はやむなく明治四〇年代初めに会津若松市新横町滝口太右衛門の一二男として生まれた遠藤十次郎に権利を譲渡している（後に遠藤の姓を継ぎ醤油醸造を営み家業に専念した）。十次郎は明治四〇年（一九〇七）水力発電をもくろみ、子息義之助と、水流調査のため裏磐梯を探索している。噴火後の荒涼とした裏磐梯を見て植林を決意した。

柳沼の近くに事務所を兼ねた遠藤別荘二階建



曽原開拓の頃/昭和17年

噴火の湯

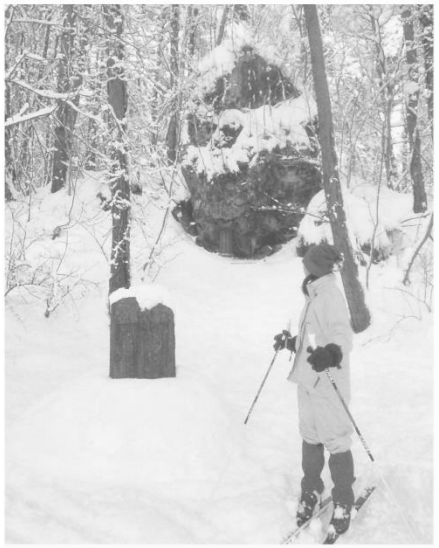
噴火の湯（上の湯）

てを建て、裏磐梯に狩猟に来ていた長野県東高遠の林学博士第一号の中村弥六と出会い技術指導を受け、一三五〇町歩の植林を完成させた。中村に恩義を感じた遠藤は、持てる土地を配分し中村に贈ろうとしたが、中村は辞退したため、「せめて弥六という名をつけよう」と現在、裏磐梯高原ホテル前庭の沼を『弥六沼』と命名した。

十次郎は、昭和五年（一九三〇）宮森太左衛門らと共に「磐梯施業森林組合」を設立し造林を継続しながら道路の整備に力を入れ、裏磐梯の自然公園化を目指してきた。遠藤らが苦労の末に植えた苗木は、水辺の苗木は根づいたものもあれば枯れたものも多かったという。

この広範囲な用地は昭和六二年（一九八七）三月三一日、北塩原村大字桧原字大府平原一一七二の一外十二筆、面積七二三万一五四六平方メートル・約七二三ヘクタールの土地所有者「磐梯施業森林組合」から福島県に所有権が移転している。

生前、十次郎は自分の墓標とする大岩に『遠藤現夢墓』と刻み、辞世の句「ながきよにみじかきいのち五〇年ふんかおもへば夢の世の中」を遺している。また裏磐梯高原ホテル前の「軍艦岩」に不動明王を祀り建立している。遠藤十次郎、宮森太左衛門、佐伯利作、長井善吉、勝俣勘太郎の名が書き残されていた。弁天沼から入り七折り坂を登れば高台に「明治神宮」がある。遠藤らが建立したであろうが、誰が、なぜ



遠藤十次郎の墓標とする大岩と辞世の句碑

建立したのか資料が無く解明出来ない。

猪苗代町川上の斉藤丹之丞は遠藤の片腕となり植林事業に従事した。平成七年（一九九五）九六歳で亡くなった。

公園の父、田島慶三は戦後、桧原湖畔に進駐軍の別荘を建て保養地とし施設を提供していた。田島は明治三八年（一九〇五）北海道留萌に男四人女二人のきょうだいの長男として生まれた。一六歳の時、函館の海産物問屋に小僧入りし、昭和初年、東京渋谷で海産物「田島屋」を開店。手広く広げて失敗した。北海道に戻るが再度日本水産の友人を頼り上京。「冷凍魚の宣伝販売」を依頼され、会津に大きな冷蔵庫が出来たので会津を根城と決めた。昭和八年（一九三三）森林組合長林健二郎と汽車の中で会う。これがきっかけで裏磐梯に入る。

田島は、桧原湖南岸一帯を公園化しようと開発に取り組み「公園」と呼んで、近代的なホテル、宿泊施設、売店、バンガロー、スキー場、養魚場などを手広く整えた。戦後、進駐軍のための電気・電話架設工事も私費で賄った。立樹から立樹へ仮電線を張って急場に間に合わせたが、「戦後とあって物不足、電線泥棒には困った」と慶三は語っていた。

進駐軍が撤退した後に、裏磐梯剣ケ峯の佐藤商店の一部を借り受け剣ケ峯簡易郵便局と役場の事務も兼ねた庁舎は、昭和二五年（一九五〇）三月一五日開局した。この簡易郵便局に田島から譲り受けた電話が一台入った。「吾妻局一七番」。裏磐梯地区に入った最初の電話であった。

遠藤十次郎も田島慶三も磐梯山中ノ湯の下から引き水し磐梯山噴火口に注入し、熱した湯を松の木管で裏磐梯高原ホテルへ引き湯している。

宮森別荘の引き湯工事に協力したのは富山県の富豪齋木氏である。昭和六年（一九三一）六月六日の東京日々新聞に『噴火口から出る湯気で変態温泉作る　富山の人が磐梯山で計画』の記事があった。北塩原村に長らく住んできた長老は「少年時代にこの湯に入った」と語る。

田島は二四年後の昭和三年（一九五五）宮森らが別荘に引き湯してきた松の木管を修復し破損していた箇所を復元し引き湯した。松の丸太をくり抜き、人力、または牛を使って磐梯山噴火口まで資材の荷揚げをした。田島は生前「運搬に使った牛を二頭も殺してしまった。可哀想だった」と語ったことがある。引き湯はしたがあまりいい結果は得られなかったという。

田島は福島県大信村生まれの中山義秀（当時三八歳）の作品「厚物咲」が裏磐梯を舞台として書かれ第七回芥川賞を受賞したことを知り裏磐梯高原ホテル再建の時、文化の香りを漂わせたいと願い昭和三一年（一九五六）に中山義秀の「裏磐梯にて歌へる」歌碑を建立した。

田島の裏磐梯公園開発に大きな後楯となったのが竹中工務店である。田島の多額の借金を肩がわりした上に、裏磐梯における諸施設の建設

「磐鏡園」現在の毘沙門沼一帯/昭和28年

を続けた。

田島は「裏磐梯開発が、私の手にバトンタッチされるまで、人からあざけられ、相手にもされず黙々として、開発に力を傾けた人達があった。今日の裏磐梯の礎は、この人たちの力によって、築かれたと言っても過言ではない。私一人の功績などとは、夢にも思いません。」と「私の歩んだ道・世界に開く秘境裏磐梯」（産業研究所・刊）に記されている。これは先達の足跡に敬意を表す田島の述懐である。裏磐梯の草分け、本当の公園とは何かを考え自力で立ち上がり、裏磐梯を世に出した「公園の父」のひとりでもある。

猪苗代千里村の秋山義次は磐梯山噴火の地、五色沼の毘沙門沼一帯を「磐鏡園」として開発した。その後、津金松女が引き継いでいる。

裏磐梯にトロッコが走るころ

前橋営林局猪苗代営林署は磐梯山森林鉄道を敷設した。大正九年（一九二〇）猪苗代駅前の土場（貯木場）から小野川不動滝の前を通りコブナラへ通じる二四キロの森林トロッコを走らせていた。営林署直轄の国策事業として吾妻山麓の原生林（広葉樹や針葉樹）の伐採作業を開始してきた。

この年に桧原村の人口は急増している。「明治二二年（一八八九）の町村制実施時の桧原村の人口（裏磐梯を含んで）四二七人に対して国勢調査の最初に行われた大正九年（一九二〇）の人口は桧原村一八三五人（女六〇五人に対し男一二三〇人）で四倍強の人口増加である。その殆どが発電工事などで多くの人々が入りこんできている」（裏磐梯・北塩原の民俗）という記録がみられたが、電力工事だけでなく猪苗代営林署の事業に従事してた人々も多くいたのである。

猪苗代駅前の土場（貯木場）へ製品を運び出していた人々や山の現場で広葉樹や針葉樹を伐採する人、集材をした人、燃料にする薪をつくる人、炭を焼く人なども含まれていて、電力工事関係の人々と営林署工事の人々とで裏磐梯の開発が緒についたと見てよいと思われる。

猪苗代水力発電株式会社は大正の始めから桧原三湖のかさ上げをし、貯水につとめてきて大正年代に桧原三湖の堰堤の工事に着手している。昭和一二年（一九三七）一二月小野川発電所落成、昭和一六年（一九四一）秋元発電所落成と続き更に昭和二一年（一九四六）一二月には沼ノ倉発電所を竣工している。北塩原村に住み、電力工事に関わった人々も多い。朝鮮人や中国人も電力工事に関わったと聞くが、未だ明らかにされていない。

猪苗代営林署は小野川を始めとする斫伐事業を大正九年（一九二〇）から始めた。この大正末期に人々が裏磐梯地区に集まり昭和年代になって定住した人々も多い。この頃から師弟教育も始まっている。営林署署員を先生とし、営林署の山の倉庫を用い学校を始めている。猪苗代駅前の土場（貯木場）までの磐梯山鉄道、森林軌道トロッコ道は製品物資をトロで猪苗代町へ運び出し、猪苗代町からは山で暮らす人々の生活物資がトロで運ばれてきた。これまでの細い山道を歩くよりトロ道は数倍も生活に役立ち山で働く人々の生活が豊かになったにちがいない。

当時の磐梯山鉄道の記録『アウストロダイムラーの走った森林鉄道』竹内昭著を入手した。昭和一〇年（一九三五）頃に裏磐梯高原を走っていたガソリン機関車は四トン未満のオーストリア『アウストロダイムラー製』だというのであった。

その後昭和一五年（一九四〇）には、曽原第二官行事業として移り築部沢山麓、大沢そして甚九郎山麓に森林軌道が敷設された。深山の山林資源は猪苗代町川上の土場（簡易製材所）へと走り続け、原材料を運搬していたのである。

曽原第二官行のトロ軌道敷が撤去されたのは昭和二四年（一九四九）である。小野川斫伐事業所の軌道敷も曽原第二官行と同じ年代に撤去していた。

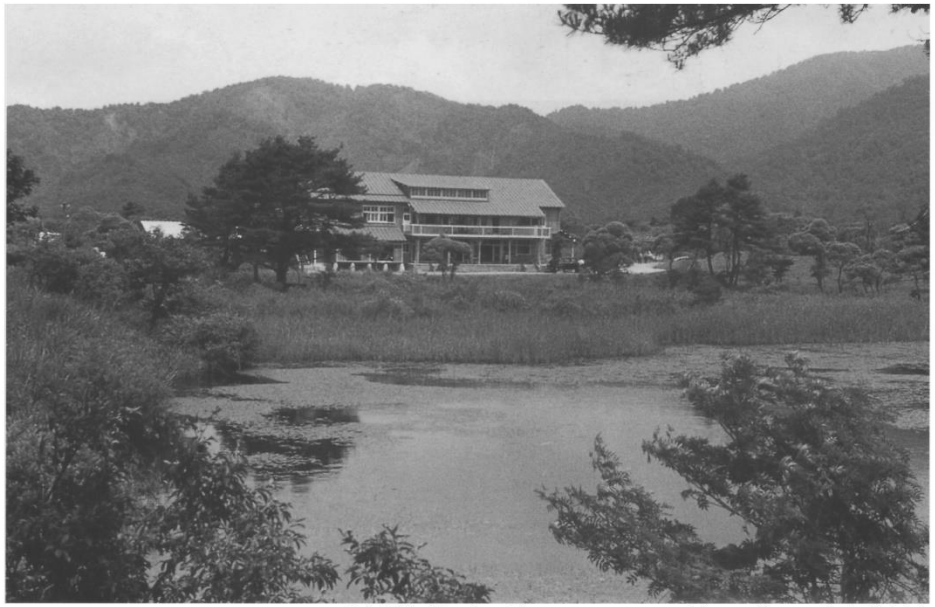
昭和一五年（一九四〇）には秋元湖北岸の林道工事を着手したが、戦争のため中止し、昭和二三年（一九四八）に再び着工し、秋元湖岸林道（現在のサイクリングロード）の竣工となった。昭和二五年（一九五〇）からは、吾妻村議場に製品事業所と名も変えて規模も拡大し昭和三五年（一九六〇）まで事業を続け、後、昭和四四年（一九六九）に桧原製品事業所の閉山式を迎え営林事業の一切が終っている。

トロが動き出した当初は猪苗代土場へ製品を下ろし、帰りは馬でトロを引かせ山の現場へ帰ってきた。馬はトロ台車の前になり、または後について馬も走ったという。長年、馬丁として働いた人の話では、家から馬を引きつれ猪苗代駅前の土場（貯木場）へ着く。帰りはトロ台車に空トロ台車を乗せ、馬に引かせて山へ戻った。山の現場に着けば明日への準備をする。伐り出された木材丸太を積んだり、製品となった木炭を積む。燃料にする棚薪も積んだ。山での荷積みが終わる頃、陽は西に傾き夕焼け空も黒づんで家路へと急いだという。

機動車（ガソリンカー）が走り始めると朝は猪苗代町長坂、帰りは猪苗代町川上で機動車とトロとの交換をした。

昭和一〇年（一九三五）には猪苗代町川上に簡易製材所が出来、木材は川上まで運搬した。「この頃は猪苗代町から川上までの道路は車とトロが走るトロ道は併用道路ではなかったか」と、いう人もいる。猪苗代町川上までのトロ軌道敷きの撤去は昭和一〇年とあるが、すでに部分的にトロ軌道敷きは撤去されていたとみてよい。

ガソリン機関車と小野川不動滝/昭和11～１２年頃



福島県営】「山の家」現在はサイトステーションがある。手前はレンゲ沼/昭和２９年

戦前のこと、「日々に働き生活を支えてきた愛馬が召集された時、愛馬の肩から日の丸の旗をかけ愛馬が見えなくなるまで見送った時は、涙があふれ止まらなかった」と語る村人もいた。裏磐梯の曽原第二官行事業所が廃止される昭和二五年頃まで、山で働く「山の男たち」の豪壮な姿が見られたものであろう。

曽原・蛇平は戦後、開拓地として入植した人々が住んでいた。噴火後の荒れ地を一鍬づつ起こす開拓事業は並大抵ではなかった。開拓では飯にはならない。開拓とは名のみ、生きてくために現金収入の道を求めなければ生きていけなかった。道普請に出る。山で木地型（会津漆器の原型）をつくる。焼き子となって炭を焼く。冬の道を桧原まで行き木炭を運搬する。秋のうち刈り取った萱で炭スゴを編む。砂利道に敷く小石を造る、クラッシャーの砕石場へ出て働く。春先、固雪を渡り歩きコブシの花芽も摘んだ。バラの実も集めた。沼へ出てヒルも掴んだ。現金になることは惜しみなく働いた。でなければ出稼ぎを余儀なくされ仕事を求めて県内や県外にでた。早稲沢・金山・桧原。小野川の集落などは昔から木地型を取るのを業としてきたが、昭和二五年（一九五〇）ころから洋食器のサラダボールの生産が高まるにつれ木地師の荒型採りの生産が減ってきた。変わる産業として原木ナメコの栽培に切り替わってきている。主にナメコは関東方面へ出荷してきた。昭和二五年（一九五〇）国立公園指定以来バンガローが盛んとなり昭和三年（一九五五）には多くのバンガローが建ちキャンプ場は賑わった。小野川、早稲沢では昭和三八年（一九六三）から高原大根の栽培が盛んとなり市場への出荷が盛んとなる。早稲沢では昭和五〇年（一九七五）米づくり農家も全耕地を畑に切り替え高原野菜栽培を本業としている。また早稲沢では昭和五七年（一九八二）、ボーリングにより温泉を湧出している。

発電所がもたらしたもの

磐梯山周辺に発電所は三つある。桧原三湖をはじめ雄国沼の水を下流に流し落差を有効に利用し発電している。小野川湖の利水で小野川発電所が昭和一二年（一九三七）一二月に竣工した。秋元発電所は昭和一六年（一九四一）六月に竣工し、秋元湖の水を白布山の山中に隧道を堀り通水し下流に水を落として稼働している。その下流に沼ノ倉発電所がある。昭和二一年（一九四六）一二月に竣工した。東京電灯株式会社は桧原二湖を猪苗代湖の補給用貯水池としてそれぞれの湖をダムとし堰堤を築造してきた。桧原湖は大正五年から六年にかけて堰堤が造られ流出口にダムが築造された。大正一二年（一九二三）猪苗代水力電気株式会社は水利使用権を東京電灯株式会社に譲渡している。大正九年（一九二〇）三月二六日長峯堰堤工事と長峯水路（新川）を通す隧道工事を開始し大正一四年（一九二五）に長峯水路として桧原湖から小野川湖へ流水してきた。長峯水路工事の飯場は高台に建っていた。工事に係わったのは福島市の大島組で地域の人々は登る坂道を「組の坂」と呼んできた。大正一二年（一九二三）から大正一四年（一九二五）には桧原三湖堰堤の工事はほぼ完工した。昭和一八年（一九四三）のころより中津川の水流を小野川湖に取り入れ水量の有効利用すべく中津川ダムと隧道工事をしてきて中津川水路が出来ていく。昭和二六年（一九五一）五月一日東京電灯株式会社は東京電力株式会社となり今日にいたっている。

現在では小野川発電所も沼ノ倉発電所も秋元発電所からの遠方監視制御により運転や水門の開閉もコントロールされ稼働している。

大正時代からの発電工事には相当数の工事関係者が裏磐梯に住み着き賑わいを見せてきた。現場にはいくつも工事飯場が建ち、川上温泉には置屋もあって繁盛した。猪苗代町の旅館、飲み屋なども大いに繁盛した時代であったという。秋元にある小野川発電所の近くには職員の社宅もあって村人口も増えてきていた。常勤の保健婦もいて保健指導にあたり、地域の人々も恩恵をうけた。また電力会社の工事に関わり勤務する人々も増えていて安定した生活ができたという。

電気の需要は石油ショック以来、益々重視され国民の生活・文化の向上に貢献を続けているが、長瀬川水系の発電工事は難工事であり、外国人の労働者もかかわり電力事業に協力していたことを忘れてはならない。

曽原の民家に電気がついた/昭和４０年頃

開拓地曽原に電気がつく前/昭和３４年頃